

絵図の「読み」とは何か

上
首里城大龍柱の向きを考える

永津嶺二

首里城復興研究会が2020年11月22日に開催した公開討論会には多くの県民の熱いまなこが注がれた。これほどの関心を呼んだのは、一週間前に神奈川県川大学の後田多敦准教授(当時)によって、ルヴェルトが撮影の最古の首里城写真が公表され、県内紙第一面(15日付)を大きく飾っていたからだろう。

王国時代と確定

その紙面に、王国時代に撮影されたのか懐疑的なコメントを寄せていた。高良倉吉委員長と安里進委員(首里城復元に向けた技術検討委員会)が、この討



ながつ・ていぞう 1953年生まれ。琉球大学名誉教授。愛知県立芸術大学大学院修士。浦添市美術館などで個展開催。論文に「橋の系譜」(琉球大学教育学部紀要)などがある。

論会で後田多氏とどのような議論を交わすのか、これが聴衆の一番の関心事だった。ところが高良氏は、那覇市歴史博物館からの情報提供があり、「御書院

ルヴェルトが写真は正面向き

日記によりフランス人の来琉が裏付けられたと、この写真が確かに1877年に撮影されたものとあつさり認めた。

これで王国時代末期、大龍柱が正面向きになっていたことが明らかになった。まさに技術検討委

員会が求めていた「首里城が改変・破壊を被らない以前、すなわち琉球王国の王城として機能していた時代の大龍柱の形態」を写真によって確定できたのである。

文書の発見必須

私は、これが大龍柱問題に決着がついた、やっと本来の創作活動に戻れると安堵した。

ところが討論会後半、安里氏

のこの発言に耳を疑った。「写真が『寸法記』や『尚家文書』の絵図が間違っているという根拠にはならず、この時代にも正面だったという物証が必要だ」

後田多氏は「相対向きが維持されるには1877年までの間に正面向きに變更された事実を示す必要がある。証明できないれば、相対説は『寸法記』絵図の読みを誤っていることになる」と発言されていた。

それは、首里城正殿の復元の



王国時代唯一の姿示す

の聞き取り)のような発言もあったが、(伝聞は史料として曖昧である。

王国時代の龍柱は、ルヴェルトが写真によって正面向きと確定した。それでも1768年から1846年には相対向きだったと主張するなら、「1846年から77年までの間に大龍柱の向きを変えた事実が記述された古文書」の発見が必須という、実に明解な話なのである。

起因は理解不足

ところが翌日の新聞では現状では双方とも決定的な根拠がないと報じられ、12月電子版の担当記者コラムにも安里氏の発言を「追認」する内容が書かれてしまった。これは、新聞社の報道姿勢として大いに問題である。この状況のすべては、絵図の「読み」の理解不足に起因すると言ってもよい。

絵図の「読み」について十分

『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』(略して『寸法記』)絵図(沖縄県立芸術大学附属図書館蔵)

明解な事例得る

昨年10月1日付他紙で私は、近代の投影法や透視図法の約束の成立する以前の例として、古代エジプトのレリーフをあげた。誰もがそのイメージを共有

に理解するためには、私の論考『絵図とはどんなものなのか』(絵図だけでは、「大龍柱は横向き」の根拠にならない)を読むか、石嶺公民館オンライン市民講座「首里城正殿 大龍柱を考える」第3回絵図とどんなもの(ユニークな配信)を視聴していただきたい。全て「琉球大学」美術教育専修HPで確認できるので、ここでは要点だけを述べたい。

18世紀琉球で描かれた「寸法記」の絵図を、高良氏は(担当記者も)、近代になってからの図法である三面図の正面図と同じだと誤解している。投影法や透視図法の約束の成立していない地域や時代の絵図では、形は認識されやすい向きで描かれているだけで、「横向きの図」はその向きに立っているという根拠にはならない。

できるからだ。古代エジプトの左向きの人物像は顔は横向き、目は正面向き、肩も正面向き、腰はやや斜め、そして足は、なんと左足が二本だ。

もちろん、左足が二本ある人がいたはずはなく、親指側からの最も認識しやすく美しい形で2本の足を描いたにすぎない。しかし、近代の約束に無意識にも支配されてしまっている私たちがこの2本の左足を奇妙なものと感じてしまう。

私は、この古代エジプトの例で、「寸法記」絵図も同じことと理解を得られると思っていた。透視図法のように固定的なひとつの視点から物を捉える、この「近代の視覚性」は、長い人類の歴史の中で、極めて特殊な極めて短い間のパラダイムしかない。これは、誰が考えても明白なところだと思っていた。だが、実際はなかなか古代エジプトと「寸法記」絵図が同様なものとは納得し難いようだ。

しかし、私は誰もが納得できる明解な例を探し出すことができた。それが「多賀参詣曼荼羅」である。

絵図の「読み」とは何か

下
首里城大龍柱の向きを考える

永津嶺二

この「多賀参詣曼荼羅」は、安土桃山時代のものである。私は2001年の紀要論文「橋の系譜」でこの絵図を取り上げた。拝殿を囲む境内は真四角、建物もさまざまな方向からの視点が混在していることに注目したのだが、改めてこの絵図をよく観察し明解な例を見いだした。

描かれた「的」

それは、この境内の下方、社頭で行われている射礼行事の場面だった。「弓を射る人」の前方、台形の中に同心円が描かれているもの、これは「的」だ。的の中心に同心円が描かれているもの、これは「的」だ。的の中心に同心円が描かれているもの、これは「的」だ。

と断定する根拠にはならない。絵図だけでは向きを特定することができないことをこの「多賀参詣曼荼羅」の的は明解に示しているのである。

相対向き 歴史学の認識欠く

琉球の美意識追求

「寸法記」絵図の大龍柱も横向きに描かれているからといって、それが横向きに立っていた

「寸法記」絵図の大龍柱も横向きに描かれているからといって、それが横向きに立っていた

と首里城一が開催され、ここで初めて「寸法記」絵図をじかに観た。

尚家文書の絵図である「百浦添御普請絵図帳(複写物)と百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」(略して「寸法記」)絵図が全て上下に対応して並べられた好企画だった。

これまでの文献等では、原本

何の写しなのか

「寸法記」絵図と「尚家文書」の絵図はほぼ完全に同図である。

第一の推論、それは、1768年の「寸法記」絵図の原本をはじめに1846年の「尚家文書」が、次に1920年代の鎌倉

か写本かさえ判断できなかったが、じかに目にし、「寸法記」絵図が写本であることが明白になった。展示解説文に「筆写...1920年代」とあるのは、紙料からも妥当と考えられ、とすれば、「だれの手による複製なのかは不明」ではなく、この絵図の所有者であった鎌倉芳太郎以外の筆写とは考え難い。原本にはあるはずの方形と円形の押印も無いため、「寸法記」絵図が写本であることは間違いないのだが、さく、これは何を写



「多賀参詣曼荼羅」(多賀本所蔵)

根拠のない主張

黒田日出男氏は東京大学名誉教授で、1970年代から、それまで文献史料によつてのみ研

開かれた議論を

これまで私は、絵画の制作者・研究者として、絵図の「読み」

について考えてきたので、ルヴェルトが写真の出現で議論は終了したと思っていた。しかし、「これまで考察してきた、私の考え方には変化が生じてきた。たとえ、ルヴェルトが写真で王国末期の形態が確定できても、人々が本心に懸けたのではないのか。例えば、西村貞雄氏は、琉球王国盛期の美意識は、あの台石に載った大龍柱では再現できないと考えている。大龍柱は正面向きで直接欄干に接続するべきであり、それが本来的琉球の美意識である。」

今こそ、「歴史学的」と叫ぶだけで、基本認識を欠如した委員を外し、実証的、かつ美的な感性も併せ持つ西村貞雄氏や、當眞嗣一氏などを招いた新しい委員会を組織し直し、美的かつ理論的に開かれた議論を始めるべきである。

そうならば、私も一県民として前向きな議論に参加でき、安心して自らの創作活動にも帰っていきける。

(琉球大学名誉教授)